

り、また77才と言う高齢で脳血管撮影上かなりの動脈硬化が認められたことから動脈瘤内に留まらず親動脈まで血栓が伸びたものと考えられた。

P-A-17) 術前脳血管写より実際には、はるかに大きかった Large, Giant 破裂脳動脈瘤 9例の検討

藤本 俊一・斎藤 和子
多田 博史・伊藤 誠康 (青森県立中央病院)
田中 輝彦 (脳神経外科)

【目的】破裂脳動脈瘤の急性期手術が一般的になった今日、術前検査としては、CT と血管撮影のみで手術にのぞむことが多い。しかし稀に血管撮影と実際の術中所見で動脈瘤の大きさが極端に異なり、操作に難渋することがある。こうした症例を retrospective に検討し、術前予測するための着目点を整理することを目的とした。

【方法】当科で経験した脳動脈瘤手術例中、術前血管写で最大径 10 mm 以下でありながら術中所見では Large もしくは Giant であった 9例の病歴、CT、脳血管写所見を検討した。【結果】動脈瘤存在部位は Acom 3例、IC 2例、MC 2例、BA 2例であり、Large 3例、Giant 6例であった。病歴では過去にクモ膜下出血発作を疑わせる episode のあるものが4例、脳梗塞の既往をもつものが1例あった。CT では脳内血腫を伴ったものが3例あった。血管写所見については実際の症例を呈示して特徴を整理したい。

P-A-18) 興味ある脳血管奇形の1例

西山 健一・川崎 昭一 (佐渡総合病院)
玉谷 真一 (脳神経外科)

症例は、45歳男性。左上肢の脱力を認める焦点運動発作にて発症。脱力症状は自然に改善したが、その後、突然の意識障害を伴う全身の強直間代発作を認めた為、当科入院。入院後は、左上肢のしびれを伴う体性感覚発作を繰り返し、そのまま意識障害を伴い、複雑部分発作に移行することもあった。CT 上、右頭頂部にわずかに低吸収域を示す病変を認め、脳血管写では、Angular artery 付近より明らかな nidus を示現せず、太い drainer が SSS に注ぎ込むような脳血管奇形を認めた。また術中所見では、feeder と思われる血管と、drainer の間に血腫と混在した病変を認め、病理組織診断は Venous malformation であった。

数種のでんかん発作を繰り返す臨床症状、及び、脳血

管写所見や術中所見から興味ある症例と思われたので、若干の文献的考察を加え報告する。

P-A-19) *de novo* multiple cavernous angiomas の1例

臼井 雅昭・斎藤 達也 (総合会津中央病院)
前田佳一郎 (脳神経外科)

右後頭葉の thrombosed angioma の摘出術後、同側半球に新たに発生した multiple cavernous angiomas の1例を経験したので報告する。

症例は10歳男子。既往歴、家族歴には特記すべきものなし。昭和62年6月頭部外傷後の CT にて異常を認め精査目的で入院。CT スキャンで右後頭葉に直径 1 cm ほどの high density mass を認めた。造影 CT では造影効果はなく、脳血管撮影でも異常所見はなかった。同年7月に摘出術を行い、当時の病理診断は thrombosed AVM であった。昭和63年4月、痙攣発作出現し、CT にて右前頭葉白質に浮腫を伴う high density area を認めた。痙攣発作の数日前に頭部打撲があったため、CT 上の異常所見はこれによる脳挫傷と判断した。平成2年5月頃より進行性の左片麻痺が出現し、CT、MRI にて右被殻から内包にかけての *de novo* cavernous angioma と診断し摘出術施行した。その後同部位の residual angioma からの再発を認め再手術により最終的には Right parietal transcortical transventricular approach により全摘出を行った。右前頭葉の脳挫傷と思われた病変もその後の MRI にて *de novo* angioma と診断した。平成6年に入り、それまでの変化のなかった右前頭葉の angioma が出血しながら増大したので摘出術を行った。最初に摘出した thrombosed AVM もその後の検討で thrombosed angioma と診断された。

P-A-20) 頭皮に発生した動静脈奇形の1例

柳沢 俊晴・笹沼 仁一
後藤 博美・小鹿山博之
後藤 恒夫・仲野 雅幸 (財)脳神経疾患
高橋 秀和・大森 恵 (研究所附属南東北
小泉 仁一・渡辺 一夫 (病院脳神経外科)

最近、頭皮に発生した動静脈奇形を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例；25歳、女性。家族歴・既往歴；特記することなし。現病歴；幼少時より、右前頭部に赤い色素沈着があり、20歳頃より徐々に増大し、圧痛を伴うようになった。